研究論文

奥高麗片口茶碗「離駒」―毛利元義との関係に注目して―

宮武慶之

奥高麗片口茶碗銘「離駒」（個人蔵。一名繁駒。本稿では離駒に統一。）は古唐津焼の奥高麗茶碗として『大正名器鑑』に所載される著名な作品である。同書でも紹介されるように、茶碗を収納する箱には墨書および花押が書かれるものの、筆者が不明である。この花押と同一な作品が確認できたことで、筆者は毛利元義であることが判明した。そこで本稿では本碗と元義の関係に注目し、さらに元義の茶の湯との関わりについて明らかにする。

一　はじめに

現在、個人が所蔵する奥高麗片口茶碗銘「離駒」（図1）は古唐津焼の茶碗として著名である。また本碗は近代の茶道研究家である高橋箒庵（義雄／一八六一－一九三七）によって編纂された『大正名器鑑（第八編）』（大正名器鑑編纂所、一九二六年）に所載される。[1] 同書では茶碗本体の解説に加え、茶碗を収納する箱墨書と、付属する添状を紹介している。先行研究では葛城三千子氏が『陶説（四八五号）』で四醉老人による箱墨書の画像を紹介している。[2] しかしながら、従来の研究では箱書にある四醉老人については明らかにされていない。

この箱墨書の花押と同一な花押は現在、下関市立豊田文化財資料室に所蔵される長府藩十一代藩主毛利元義（四醉庵、梅廼門真門／一七八五－一八四三）による共筒茶杓「青龍」の筒墨書にみられる。このことから、花押の比較検討を行い、「離駒」の箱墨書の記述に注目したい。

元義は狂歌を鹿都部真顔（一七五三－一八二九）に学び、清元「梅の春」の作者として知られる。同藩十代藩主毛利匡芳（一七五八－一七九二）の長男として生まれる。官位は従四位下。甲斐守を名乗った。

従来、元義については狂歌や清元の作者としての研究が行われている。また元義は女流俳人田上菊舎（一七五三－一八二六）との交流があった。上野さち子氏による『田上菊舎全集（下巻）』（和泉書院、二〇〇〇年）には『都の玉ぎぬ』が所収される。同書には次のような記述がある。

それより三日よかもへだてぬほどに、先づと、君侯の御殿に登り、何くれのことゞもうかゞひ奉るに、替らせ給はぬ御慈悲浅からぬより、玉句をさへ拝舞し奉りぬ

行帰りけふ浪華より薫る風　御

夏にすゞしきめぐみ海山　菊舎

さん橋の上は二階の格子にて　御[3]

元義と菊舎は俳諧を通じた交流のあったことが知れる。

元義の狂歌については久保田啓一氏により『西国大名の文事』（葦書房、一九九五年）の中で紹介され[4]、文芸については渡辺憲司氏による『近世大名文芸圏研究』（八木書店、一九九七年）でも紹介される[5]。

元義と茶の湯について、横井清氏は『芸能史研究（九十七号）』で、元義の茶会に兼見徳庵が参会した際に、持参した一巻の古文書について次のように紹介されている。

侯（毛利元義）は披見の上、「錦繡」なる題字を付し、自ら竹筆を揮ってこの二文字を薄藍紙に書した。題字は巻軸の見返を飾り、全十七点の古文書とともに今日に伝わった[6]

元義の茶会に参会した記録や、自作の茶杓が現存するのみで、元義自身の茶の湯については資料の不足から注目されなかった。

これまでの筆者の研究で明らかにしたことは新発田藩溝口家の所蔵品に元義の書付のある作品を所蔵していたことである[7]。また溝口家の記録から元義は高麗蕎麦茶碗銘「苔筵」を購入している記録がみられ、元義による江戸での道具収集が知れる。

当該時期の茶の湯文化に関する研究では、松平不昧（一七五一―一八一八）や溝口翠濤（一七九九―一八五八。以下、翠濤に統一。）、井伊直弼（一八一五―一八六〇）などの研究が中心になされるが、そのほかの大名については資料の不足から研究があまり進展していない。そのため元義に注目することで、当時の江戸における茶の湯文化の交流を明らかにできるものと期待される。

本稿では「離駒」の箱墨書の筆者が元義である点に注目し、江戸での翠濤や、江戸の町人数寄者吉村観阿（白醉庵／一七六五―一八四八）の交流に注目すると共に、元義が所持した道具を明らかにしたい。

二　奥高麗片口茶碗「離駒」

本碗は奥高麗特有の釉薬で、総体にふくよかに造られている。焼成時期は桃山時代から江戸時代初期と推定される。高台付近（図2）は土見せになっており、胎土の質感を感得できる。『大正名器鑑』編纂時の所有者は侯爵井上勝之助（一八六一―一九二九）である。本碗を収納する箱のほか、外箱、大外箱がある。

『大正名器鑑』に所載される外箱の記述から、元々は半日庵[8]が「離駒」として箱墨書をし、所持した道具のうちで第一の道具として愛蔵したことがわかる。この茶碗の伝来は淀屋个庵、北国屋吉左衛門、鹿島屋勘三郎、加賀屋又吉で、その後、明和六年（一七六九）には無想庵なる人物が所持していた。この茶碗は近代になって美術商の松山吟松庵（喜太郎／一八三六―一九一六）が所持していたが、その後、井上馨（一八三六―

一九一五）が所持し、その後は養嗣子である勝之助が所蔵した。

井上家は大正十四年（一九二五年）十一月九日に東京美術倶楽部で売立を行っている。その売立目録が『井上侯爵家御所蔵品入札』である。目録をみると、やはりこの茶碗は

一二三　古唐津茶碗　銘離駒　箱書　直斎[9]

として所載されている。

箱墨書から武者小路千家七代目千宗守堅叟（直斎／一七二五－一七八二）により「からつ　明和六巳丑五」と書かれ、茶碗の図と花押があることが知れる。

大外箱の箱墨書については、かつて葛城三千子氏が『陶説（四八五号）』で図版を紹介されている（図3）。しかしながら従来この墨書の筆者である四醉老人については、明らかにされてこなかったため改めて検討したい。箱墨書をみると次のような記述がある。

此奥高麗片口の茶碗伝はり来りける事のよしは、添書付に委しく見えたり。箱の蓋に離駒としるせしは、半日庵の筆なりとぞ。ゆえありて我もとにからうじて此器を得つるは、あれゆく駒をつなぎとどめし心地せられて、其嬉しさは、いふもさらなり、されば離るるといふ文字を、繋といふ文字にとりかへて、今より後繋駒と呼て、ながく是をもてあそばむとおもふも、いさみたつ心の駒のひかるるかたにこそ

難波江に放ちし駒をひきかえしつなぐ手綱は江都のむらさき

天保七年十一月冬至の日しるす　四醉老人（ママ）（花押）[10]

四醉老人の花押は一の字を書き、そのまま筆を右上方へと書いたものか、もしくはその逆の筆跡である。

ところで現在、下関市立豊田文化財資料室が所蔵する毛利元義作共筒茶杓銘「青龍」（図4）がある。本作品は二〇一一年に下関市立長府博物館で開催された特別展「長府毛利家十四代記」に出品されており、同展覧会図録『長府毛利家十四代記』（二〇〇一年）では次のように紹介されている。

元義が西市本陣で茶会を催した際、自ら製作し、本陣主の中野新左衛門隆郷に下賜したもの。杓筒に「青龍」と元義が自署しており、貼紙には「顕明君御作」と隆郷が記している。[11]

茶杓の腰は低く、裏はややえぐられている。櫂先はゆるやかに削られている。筒墨書に書かれる花押に注目してみると一の字を書き、そのまま筆を右上方へと書いたものもしくは、その逆の筆跡である。この点から、「離駒」の墨書にあるものと運筆は同一であり、四醉老人とは元義であると判断される。[12]

ここで四醉という号に注目するとき、新発田藩十代藩主溝口直諒（翠濤／一七九九－一八五八）による、茶の湯で交流のあった人物を記した『茶説茶会略』（東京大学史料編纂所蔵）には次のような記述がある。

四醉庵・毛利甲斐守元義之茶号也

〔読み〕

四醉庵は毛利甲斐守元義の茶号なり。

四醉庵とは元義の茶号であることがわかり、後年は四醉老人と名乗っていたことが判明する。さらに溝口家の記録である『幽清館雑記（十巻）』（東京大学史料編纂所蔵）には

毛利甲斐守殿隠居所名号
四醉庵　すきや　雲門閣　二階[13]

との記述があり、四醉庵とは数寄屋の号でもあり、さらに雲門閣という二階建の数奇屋もあったことが知れる。

この茶碗には大外箱があり、箱甲には墨書で「繋駒」とあり、左下には「四醉清玩」の方印が捺されている。

この印は現在、個人が所蔵し下関市立歴史博物館に寄託所蔵される長府藩主毛利家歴代藩主の印影を納めた『御印影』にある元義の印と合致すると思われる（図5）。また右下には「碧雲台」の印があり、井上家を離れてからは益田孝（鈍翁／一八四八－一九三八）の所蔵であったことが知れる。

そこで大外箱の筆者が元義であることを踏まえ、箱墨書の内容をみると茶碗を収納する箱の裏に離駒と書いたのは半日庵であることがわかる。故あって元義が所蔵することとなった。この茶碗を入手した嬉しさから、荒れゆく駒（馬）を繋ぎ止めたい心が起こり、銘にある「離駒」の「離」の一文字を「繋」に改めたことが記される。箱には「難波江に放ちし駒をひきかえしつなぐ手綱は江都のむらさき」と狂首を詠じている。この墨書が書かれたのは　天保七年（一八三六）十一月冬至であり、元義行年五十二歳のときの墨書である。以上の点から、「繋駒」墨書の筆者は元義によるものとわかる。

茶碗に付属する添状について『大正名器鑑』では次のように紹介される。

此茶碗元と大阪にあり、毛利家の君侯之を所望せしに、所有者非常の高値を主張せしに、行掛り上己むを得ず之を買上げられしに、藩臣中に硬骨の士ありて之を諫め、斯る器物に大金を投ずる事、お家の為めに然る可からずとて、諫奏の後、遂に切腹したりと云ひ伝ふ。而して毛利君侯は此茶碗の銘離駒を、自ら繋ぎ得たりとて、爾後繋馬（ママ）と改名せられたりとなり。切腹の事、或は後世好事家の事実を大形に言ひ伝へたる者に非ずや、些か疑ふべき廉あれど、聞き伝ふる儘を記し置くのみ。[14]

この茶碗は大坂にあったようであるが、毛利侯すなわち元義が所望した。当時の所有者は無想庵であったのであろう。元義の所望のため無想庵は、売値を吹っかけてきたようであるが、言い出した以上、元義も引き下がれず、大金を投じて購入することとなる。このことは藩中に知れ渡るところとなり、家臣の中には諫める者もあった。その者は藩主に意見した後、切腹した。元義はこの茶碗の銘は離駒であったが、自ら繋ぎ止める（このことは切腹した家臣の諫言のことも含めてか）意味を込めて「繋駒」としたのであったことがわかる。この添状の筆者は伝聞ではあるが、そのままを記述するとして書き残している。[15]

三　元義の所持した道具

元義自身が所持した茶の湯道具では奥高麗片口茶碗銘「離駒」のほか、どのような作品があったのであろうか。

筆者のこれまでの研究で、元義が所持したとする作品について、『野村美術館研究紀要（第二十五号）』で、高麗蕎麦茶碗銘「苔筵」であったことを明らかにした。[16]

蕎麦茶碗とは『新版茶道大辞典』（淡交社、二〇一〇年）によれば「高麗茶碗の一種。白色系の粗い胎土に黄緑色の釉薬がかかり、やや青みがかった李朝中期の平茶碗である。名称は井戸脇と同様、井戸の側という意からきたとする説もあるが、むしろ地肌や色合いが蕎麦に似ていることから称された。実際は釉薬ではなく、胎土の中に黒い砂状の粉末が混ざっているもの」とされる。

元義が入手した蕎麦茶碗「苔筵」はもともと、松平周防守家にあった。当時の周防守家の当主は石見浜田藩三代藩主、松平周防守康任（一七九九－一八四一）である。周防守家が所持した茶碗とは、康任が三百両で購入し、銘は松平不昧（一七五一－一八一八）により「苔筵」と付けられた。その茶碗について、同書では以下のような記述がある。

右苔筵ハ先年毛利甲斐守様御買入ニ相成候右者世上ニ申評判也

康任から毛利甲斐守、すなわち元義に売却されて、当時の茶の湯界では評判となっていたことがわかる。

ところで翠濤による和漢の絵に関する借覧または拝見の記録である『和漢画図筆記』（東京大学史料編纂所蔵）には土佐光信（一五二五没）の筆とされる春画について次のような記述がある。

○土佐光信春画　八段　一巻

右一軸は毛利甲斐守氏先年中川氏家老ゟ払に出るを買入りせられし由十五両と申を五両ニテ手ニ入れられしと也辰九月十七日借賞由[17]

光信による春画一巻を岡藩主中川家の家老家から売りに出されたのを、元義が購入したことがわかる。その価格も五両であった。九月十七日に翠濤は借用したことがわかる。このように、当時の大名等で払い物として売りに出た道具を元義が購入していたことが確認される。

このほか元義の箱墨書のある茶器の存在が考えられる。というのも昭和十年十二月十九日、大阪美術倶楽部で高見家と某家の売立が開催された。そのときの売立目録が『雲州簸川郡（大門）高見家及某家所蔵品入札』である。目録中、

一三一　晴川院下絵秋草蒔絵朱茶器[18]

が図版（図6）とともに所載される。図版はモノクロであるが朱地に菊や薄などの秋草が蒔絵された茶器であると考えられる。茶器蓋裏の花押の人物は特定できない。箱墨書甲部には

秋草薄茶器

とあり、裏には

晴川院下画　三十之内（花押）

とある。この花押は元義のものである。狩野養信（晴川院／一七九六－一八四六）が下絵を描いた茶器で三十作の内の一つであることがわかる。

四　元義の交友

このように武家から流出した払物を入手していることや、茶の湯道具に関心の高い元義の姿が想像されるが、江戸での茶の湯を通じた交流はどのようなものであったのであろうか。先述の翠濤による『茶説茶会略』では次のよう記述がある。漢文の読みは高橋忠彦氏の教示による。

与余素親友・而又為茶友．来往頻次．余茶事以此時為方盛矣．四醉庵既逝・而十二年于茲観阿没・而七年自此漸衰蓋不有能賞監者・則楽亦少矣．凡物盛・則必衰・必然之理也．四醉庵、毛利甲斐守元義之茶号也、與余素親友、而又為茶友、来往次、余茶事以此時為方盛矣、

〔読み〕

余と素（もとよ）り親友にして、又た茶友なり。来往頻次、余が茶事は此時を以って方に盛んなりとなす。四醉庵既に逝きて茲に十二年、観阿没して七年。此より漸く衰ふ。蓋し能く賞監する者有らざれば、則ち楽みも亦た少からん。凡そ物盛んなれば、則ち必ず衰ふるは、必然の理なり。

翠濤とは親友であり、茶友でもあった。翠濤と元義は互いに行き来したようで、翠濤はこの時期、多くの茶会を開催していたようである。この文章が書かれたのは嘉永五年（一八五二年）であり、元義が没して十二年が経ち、後述する吉村観阿が没して七年が経とうとしている。この頃頻繁に茶会を開催していたようである。また両者が没したことで、茶器などを賞翫する楽しみの機会が減ったとしている。

これまで筆者の研究では長府毛利家と溝口家の姻戚関係について注目してきた。元義の父、毛利匡満（一七四八－一七六九）の正室が新発田藩七代藩主、溝口直温（一七一六－一七八〇）の娘、民姫（麗章院）である、この点から元義からみて翠濤は甥にあたる。このような関係もあって、親しく交流したものと考えられる。また元義と翠濤の関係について溝口家の所蔵した美術品の所蔵品リストである蔵帳のうち掛物では翠濤筆の圓相と、元義筆の狂歌を書いた合作の存在が確認され、茶道具の蔵帳では元義の箱墨書が書かれた象牙手桶薄茶器が所載されていた。[19] このように元義と翠濤との交流は茶の湯を通じ、茶会の往来や合作の作成、道具の譲渡がなされていたことが確認される。

その後の調査により翠濤と元義の合作で蔵帳に所載されないものとして溝口翠濤画毛利元義賛「梅月図」（個人蔵。図7）の所在を確認した。構図は月と老木に生える梅、竹、二匹の亀を描く。絵の署名は「景山筆」とあり翠濤によるもので、賛は

梅か香に酔やしつらん

春の夜の
つきもかすみて
影のおりつつ

とあり署名は梅廼門題とあることから元義によるものとわかり、その交流が広かったことがうかがわれる。

ところで先述の『茶説茶会略』中、翠濤及び元義と交流した人物として観阿の名前を挙げている。では元義と観阿の関係についてはどのような交流があったのであろうか。これまでの筆者の研究では天保七年（一八三六）五月十五日に翠濤は観阿にその立像をみせたところ、観阿から坐像を描く要請があった。翠濤はその要請に応じて当日に坐像を描き与えた。その後、元義にも小引を所望していることが確認できる。現在、翠濤および元義による「苦楽翁行楽図」の現存は確認できないが、浅草田原町の白醉庵には多くの大名が集ったとされ、小引を元義が書いている点から元義もその一人であった[20]。

観阿は諸大名との交流を持ったが、その交流は茶器の鑑定や取次ぎであった。このことからも元義による道具収集にも観阿は取次ぎや鑑定で関わったものと考えられる。

五　むすび

従来、筆者不明とされていた「繫駒」の筆者および四醉老人が元義であることが判明した。箱墨書の記述から、元義が本碗の銘を「離駒」から「繫駒」に追銘していることが確認できた。さらに本稿では元義の交流とコレクションの一部を明らかにした。

元義は翠濤や観阿とも交流があった。元義による茶の湯との関係は資料の不足から、これまで明らかにされてこなかったが、蕎麦茶碗銘「苔筵」や、土佐光信筆春画などを入手している事が確認できた。溝口家の記録には元義の箱墨書のある作品が所載され、道具の譲渡があったものと考えられる。また両者に共通する人物として観阿との交流が確認できた。

後年、元義は狩野晴川院が下絵を描いた茶器の箱に墨書を認めていた。晴川院をめぐっては翠濤や観阿との交流がみられる。というのも後年、天保十四年に観阿は翠濤、晴川院、小堀宗中（一七八六－一八六七）に福禄寿の合作を所望していた。このことから元義在世の時より三者との交流があったものと推測される。

翠濤や観阿との交流は、少なからず元義を茶の湯への関心を誘うものであったと結論することができる。

謝　辞

本稿執筆にあたり調査にご協力いただきました個人のご所蔵家、東京大学史料編纂所、下関市立豊田文化財資料室、下関市立歴史博物館、新発田市立歴史図書館、日本陶磁協会、漢文の読みを御教示いただきました高橋忠彦氏に深謝申し上げます。

付記

本研究成果は次の研究助成による。宮武慶之「近世江戸時代後期の美術品と移動に関する研究―溝口家を起点に―」、平成三〇年度高梨学術奨励基金・若手研究助成（美術史）。

註

（1）高橋義雄編『大正名器鑑』第八編、大正名器鑑編纂所、一九二六年、一四一－一四二頁。
（2）葛城三千子「「離駒」と「四酔老人」」『陶説（四八五号）』、日本陶磁協会、一九九三年、六二－六六頁。
（3）上野さち子編『田上菊舎全集』下巻、和泉書院、二〇〇〇年、六六〇頁。
（4）雅俗の会編『西国大名の文事』葦書房、一九九五年、二〇－二四頁。
（5）渡辺憲司『近世大名文芸圏研究』八木書店、一九九七年。
（6）横井清「江戸初期千家茶人の動向瞥見」『芸能史研究』九十七号、芸能史研究会、一九八七年、二一頁。
（7）宮武慶之「高麗堅手鉢子茶碗銘《白妙》について」『野村美術館研究紀要』第二五号、二〇一六年、九九－一〇九頁。
（8）なおこの当時に活躍した人物で半日庵を名乗る人物では江戸町人の水村仁兵衛がいる。
（9）売立目録『井上侯爵家御蔵品入札』。大正十四年。東京文化財研究所蔵。請求記号美研－一〇〇八。
（10）前掲注（2）。葛城三千子「「離駒」と「四酔老人」」。六四頁。
（11）下関市立長府博物館編『長府毛利家十四代記』（下関市立長府博物館、二〇一一年、二五頁）では、「七七　茶杓　毛利元義作」として図版が所載され、解説は四五頁にある。
（12）なお元義の公用の花押でなく、管見の限りこの花押は茶の湯で使用した花押と考えられる。
（13）『幽清館雑記』巻十。東京大学史料編纂所蔵。請求記号溝口家史料－三二五。
（14）前掲注（2）。葛城三千子「「離駒」と「四酔老人」」。六五頁。
（15）長府毛利家編『毛利家乗』復刻版、防長史料出版社、一九七五年。当該の記述について毛利家の正史である『毛利家乗』では、確認できない。
（16）前掲注（7）。
（17）『和漢画図筆記』。東京大学史料編纂所蔵。請求記号溝口家史料－三四四。
（18）売立目録『雲州簸川郡（大門）高見家及某家所蔵品入札』
（19）前掲注（7）。
（20）宮武慶之「白醉庵・吉村観阿について」『日本研究』第五十四集、国際日本文化研究センター、二〇一七年、三九－七七頁。

図３　奥高麗片口茶碗銘「離駒」を収納する箱墨書
（『陶説』四八五号より）

図１　奥高麗片口茶碗銘「離駒」
（個人蔵）

図２「離駒」高台

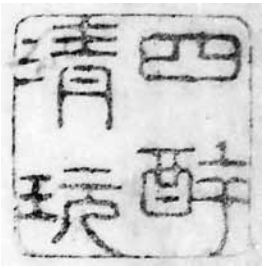

図５『御印影』にある
「四醉清玩」の印影

図７　溝口翠濤画毛利
元義賛「梅月図」
（個人蔵）

図６　狩野晴川院下絵秋草蒔絵朱茶器
（『雲州簸川郡(大門)高見家及某家所蔵品入札』より）

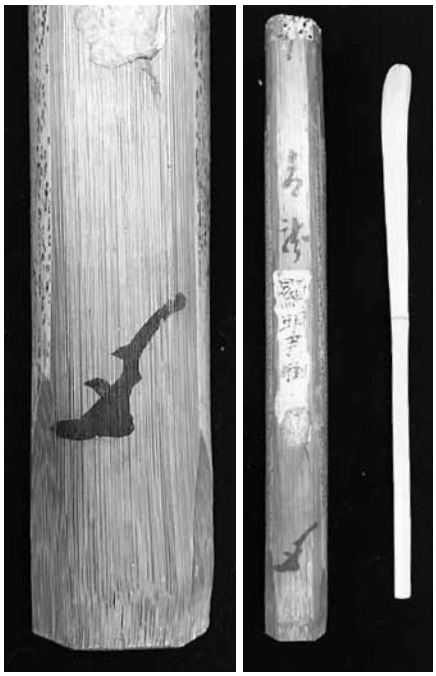

図４　毛利元義作共筒茶杓　銘「青龍」
（下関市立豊田文化財資料室蔵）